

植物とともに過ごした 94年の生涯

コーヒーは
モカと
ブラジルの
ブレンドが好き

描画道具
京都の筆師村田九郎兵衛
が作った蒔絵筆を愛用
(高知県佐川町教育委員会)



旧式牧野式胴乱(レプリカ)
野外で採集した植物を持ち歩いたための
ブリキ製のカバン



煙草とお酒は
飲まず、
甘いものが
好き

小学校を2年
あまりで自主退学
独学を貫く

基本的に
好き嫌いはなく、
特に牛肉が大好き
魚類は晩年に
よく食べた



土佐の山野で
採集に励んでいた20歳ごろ



1924(大正13)年8月



長野県霧ヶ峰 1937(昭和12)年



東京帝国大学理科大学植物学教室にて
1900(明治33)年

全国の山々を
駆け回り
鍛えられた
健康な足

明治32	1899年	37歳
明治26	1893年	31歳
明治29	1896年	34歳
明治24	1891年	29歳
明治23	1890年	28歳
明治22	1889年	27歳
明治21	1888年	26歳
明治20	1887年	25歳
明治19	1886年	24歳
明治17	1884年	22歳
明治14	1881年	19歳
明治10	1877年	15歳
明治9	1876年	14歳
明治7	1874年	12歳
明治6	1873年	11歳
明治5	1872年	10歳
明治4	1871年	9歳
明治3	1870年	8歳
明治2	1869年	7歳
明治1	1868年	6歳
明治0	1867年	5歳
明治-1	1866年	4歳
明治-2	1865年	3歳
明治-3	1864年	2歳
明治-4	1863年	1歳
明治-5	1862年	0歳

牧野富太郎ヒストリー

4月24日誕生。土佐国高岡郡佐川村、現高知県高岡郡佐川町に一人息子として生まれる。
幼名佐川太郎。生家屋敷は酒造と雑貨商を営む裕福な商家だった。
父久平病死。
祖父、小左衛門病死。このころ富太郎と改名。祖母浪子に育てられる。
土居謙徳の寺子屋で習字を学ぶ。
伊藤徳裕(蘭林)の塾で漢学を学び、名教諭で西洋の諸学科を学ぶ。英語学校の生徒となる。
佐川小学校に入学。
小学校の授業に飽き足らず、2年で自主退学。
文部省掛図一博覧会一だけに興味を覚える。
このころ「重訂本草綱目啓蒙」や「救急本草」で植物の名前を覚え、植物採集などをして遊ぶ。
請われて佐川小学校授業生(臨時教員)となる。
第2回内閣勸業博覧会見物と、顕微鏡や書籍の購入のためはじめて上京し、農商務省博物館に田中芳男らを訪ねる。日光、箱根、伊吹山などで採集し、佐川に帰る。高知県高岡郡に1ヵ月採集旅行。このころ、自由民権運動に携わる。
二度目の上京。東京大学理学部植物学教室へ出入りが許される。この年より明治26年までの間、東京と郷里を往復し、高知では採集と写生に励む。日本植物誌編纂の大意を抱く。
箱根に滞在し、芦ノ湖の水草を調査。このころ石版印刷の技術を習う。
市川延次郎、柴田五郎と植物学雑誌「創刊」に関わる。
巻頭論文に「日本産のむしる属が掲載される。
祖母浪子病死。
小澤善衛と所帯を持つ。「日本植物志」刊行を始める。
「植物学雑誌」第3巻第23号に大久保三郎と日本ではじめて「新種マツノササ」の名を発表。
佐川理学堂発足。横倉山で「オロギン」採集。
東京府小若村、現江戸川区北小若で「ムシモ」発見。
矢田部教授より植物学教室出入りを禁じられる。
実家の家財整理のため帰郷。高知下での採集を行う。「日本植物志」第1巻第1集で「オロギン」の採集について、ロシアのキンモウイチのものに赴こうとするが、マシモウイチの死去により断念。
東京大学理学部助手となる。
台湾に植物採集のため出張する。
「新撰日本植物図説」刊行を始める。

牧野富太郎の息吹に触れる主なスポット

高知市(高知県) 高知県立牧野植物園

富太郎が生前から完成を心待ちにしていた「高知県立牧野植物園」は、逝去の翌年1958(昭和33)年4月に、高知市五台山の四国霊場第31番札所竹林寺の「南の坊」跡の周辺を譲り受け、開園しました。その2年後の1960(昭和35)年に、富太郎が生涯をかけて収集した約4万5千冊もの蔵書をご遺族により高知県に寄贈され「牧野文庫」を開設しました。現在約8haの園内では、富太郎ゆかりの植物をはじめ西南日本の野生植物を中心に、温室の熱帯植物や薬用植物など3,000種類以上の多様な植物を観賞することができます。展示館では、富太郎の人物や業績を紹介した常設展示、シアターで上映する植物の世界を体感できる高精細なオリジナル作品などお楽しみいただけます。隣接の竹林寺とあわせて、心むむ時間をお過ごしください。

●開園時間:9:00~17:00(最終入園16:30)
●入園料:一般730円(高校生以下無料)、団体630円(20名以上)
●休園日:12月27日~1月1日、メンテナンス休園あり
●高知県高知市五台山4200-6 ☎088-882-2601
●www.makino.or.jp

※駐車場や交通情報は、ご来園前に必ずホームページでご確認ください。
◀2023(令和5)年5月に植物資源研究の拠点として、「植物研究交流センター(愛称ラボテラス)」がオープン。1階は実験室や生業を収蔵した標本庫などを見学できるエリア。3階には軌道抜駅のレストランとミュージアムショップがあります。

QRコード:

佐川町(高知県) 牧野富太郎ふるさと館

富太郎の生まれ故郷。幼少時代に駆け回った金峰神社や、博士にちなみ名付けられた牧野公園、生家を資料館として復元した牧野富太郎ふるさと館など、富太郎ゆかりの場所を巡ることができます。

●開館時間:9:00~17:00 ●入館料:無料
●休館日:月曜日、年末年始(12/29~1/3)
※祝日の場合は翌日 ●高知県 ホームページ
高岡郡佐川町甲1485番地
☎0889-20-9800
●sakawa-kankou.jp/spot/9

QRコード:

越知町(高知県) 横倉山自然の森博物館

佐川町に隣接する越知町は、富太郎の植物観察のフィールドであった横倉山をはじめ、横倉山の植物、地質、歴史などに触れることができる博物館も必見です。

●開館時間:9:00~17:00 ●入館料:大人500円、高校・大学生400円、小中学生200円、団体100円引き(20名以上) ●休館日:月曜日
※祝日の場合は翌日 ●高知県 ホームページ
高岡郡越知町越知丙737-12
☎0889-26-1060
●www.yokogurayama-museum.jp

QRコード:

練馬区(東京都) 練馬区立牧野記念庭園

富太郎が1926(大正15)年から1957(昭和32)年に生涯を終るまで過ごした住宅と庭の跡地を一般公開。「我が植物園」として大切にされた庭では、300種類以上の草木類を季節ごとに観賞できます。記念館では愛用した道具や著作などを展示しています。

●開園時間:9:00~17:00 ●入園料:無料
●休園日:火曜日 ※祝日の場合は翌平日 ●東京都練馬区東大泉6-34-4 ☎03-6904-6403
●www.makinodeien.jp

QRコード:

高知県観光博覧会

牧野博士の新休日
~らんまんの舞台・高知~

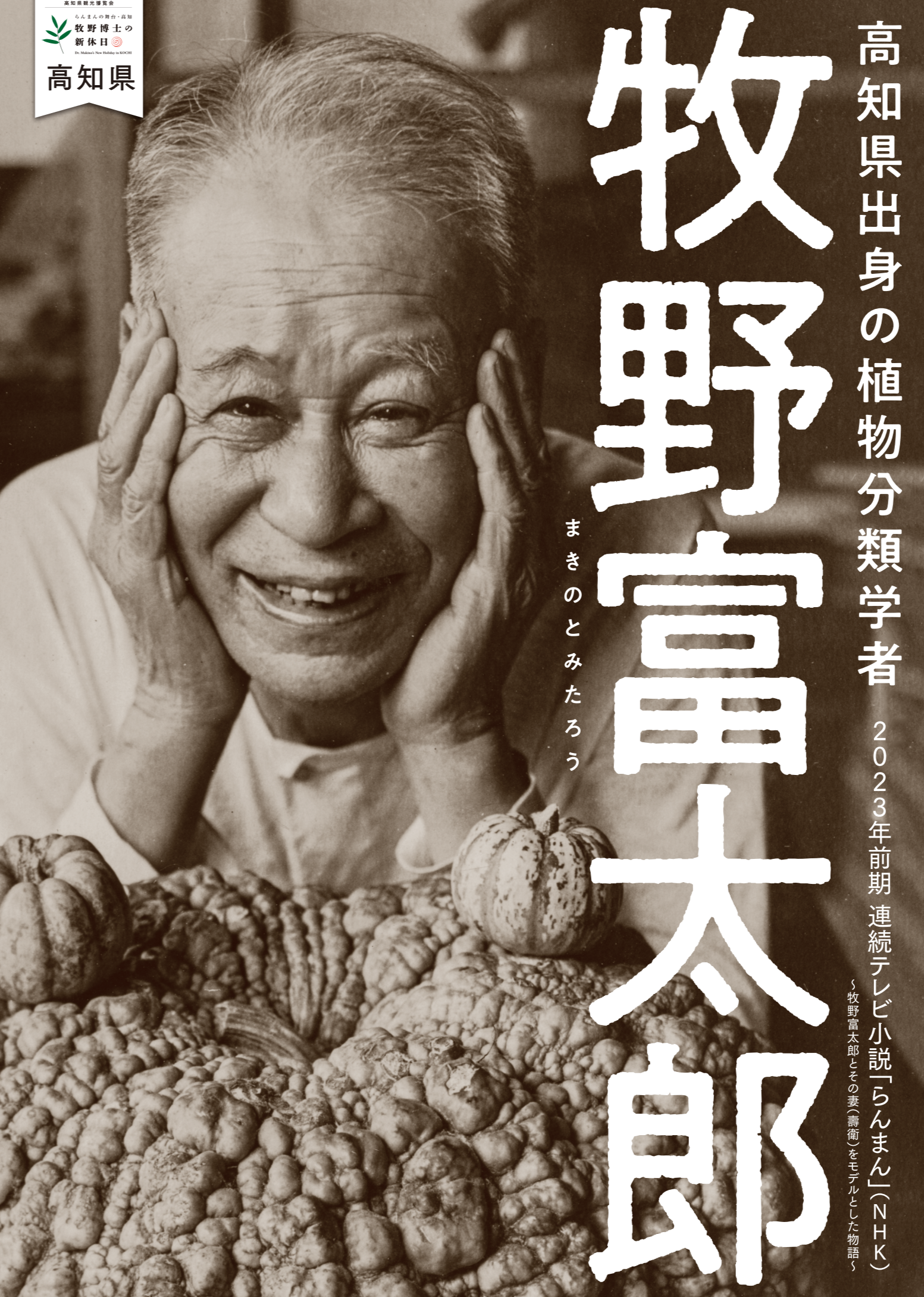
博覧会期間 2023(令和5)年3月25日国
~2024(令和6)年3月31日国

牧野富太郎のふるさと・高知県。連続テレビ小説「らんまん」の放送を契機として、高知県立牧野植物園や佐川町、越知町を中心に、県全域で観光博覧会「牧野博士の新休日~らんまんの舞台・高知~」を開催中です。四季折々の草花をはじめ、自然、食、歴史など本県の魅力を存分にご体感ください。

お問い合わせ
連続テレビ小説を生かした博覧会推進協議会
(高知県観光政策課内) TEL088-823-9606
https://kochi-tabi.jp/makino-expo/

QRコード:

本リーフレットの記事及び画像の転載はご遠慮願います。 © 連続テレビ小説を生かした博覧会推進協議会・公益財団法人高知県牧野記念財団(高知県立牧野植物園指定管理者)



牧野富太郎

高知県出身の植物分類学者 2023年前期連続テレビ小説「らんまん」(NHK) 牧野富太郎とその妻善衛をモデルとした物語

牧野富太郎

MAKINO TOMITARO [1862~1957]

高知県高岡郡佐川町生まれ。土佐の豊かな自然の中で植物を友として育ち、独学で植物知識を身につける。22歳で上京し東京大学理学部植物学教室に入りを許され、植物分類学の研究に打ち込む。生涯で1,500種類以上の植物を発表し、収集した標本は40万枚以上、蔵書は約4万5千冊を数える。植物図の名手としても知られ、描き残した植物図はスケッチ含む1,700枚以上。植物知識の普及活動にも尽力し、著作「牧野日本植物図鑑」は今なお研究者や愛好家の必携の書とされる。植物を知ることの大切さを子どもから大人にまで広く伝え、94年の生涯を閉じた。

剪定鋏は
ドイツ製
ヘンケルス社
を愛用



晩年、練馬区東大泉の自宅にて

愛用の眼鏡
視力が良く老眼鏡は
必要なかったとか
(高知県佐川町教育委員会)



チーコを抱く富太郎
牧野家の歴代の
飼い猫の名前はチーコ

音楽、歌謡、
絵画など
多趣味

蝶ネクタイ
採集や外出する
ときはスーツ着用



昭和33	1958年	94歳
昭和32	1957年	93歳
昭和31	1956年	92歳
昭和30	1955年	91歳
昭和29	1954年	90歳
昭和28	1953年	89歳
昭和27	1952年	88歳
昭和26	1951年	87歳
昭和25	1950年	86歳
昭和24	1949年	85歳
昭和23	1948年	84歳
昭和22	1947年	83歳
昭和21	1946年	82歳
昭和20	1945年	81歳
昭和19	1944年	80歳
昭和18	1943年	79歳
昭和17	1942年	78歳
昭和16	1941年	77歳
昭和15	1940年	76歳
昭和14	1939年	75歳
昭和13	1938年	74歳
昭和12	1937年	73歳
昭和11	1936年	72歳
昭和10	1935年	71歳
昭和9	1934年	70歳
昭和8	1933年	69歳
昭和7	1932年	68歳
昭和6	1931年	67歳
昭和5	1930年	66歳
昭和4	1929年	65歳
昭和3	1928年	64歳
昭和2	1927年	63歳
昭和1	1926年	62歳
大正15	1946年	61歳
大正14	1945年	60歳
大正13	1944年	59歳
大正12	1943年	58歳
大正11	1942年	57歳
大正10	1941年	56歳
大正9	1940年	55歳
大正8	1939年	54歳
大正7	1938年	53歳
大正6	1937年	52歳
大正5	1936年	51歳
大正4	1935年	50歳
大正3	1934年	49歳
大正2	1933年	48歳
大正1	1932年	47歳
明治44	1911年	46歳
明治43	1910年	45歳
明治42	1909年	44歳
明治41	1908年	43歳
明治40	1907年	42歳
明治39	1906年	41歳
明治38	1905年	40歳
明治37	1904年	39歳
明治36	1903年	38歳
明治35	1902年	37歳
明治34	1901年	36歳
明治33	1900年	35歳
明治32	1899年	34歳
明治31	1898年	33歳
明治30	1897年	32歳
明治29	1896年	31歳
明治28	1895年	30歳
明治27	1894年	29歳
明治26	1893年	28歳
明治25	1892年	27歳
明治24	1891年	26歳
明治23	1890年	25歳
明治22	1889年	24歳
明治21	1888年	23歳
明治20	1887年	22歳
明治19	1886年	21歳
明治18	1885年	20歳
明治17	1884年	19歳
明治16	1883年	18歳
明治15	1882年	17歳
明治14	1881年	16歳
明治13	1880年	15歳
明治12	1879年	14歳
明治11	1878年	13歳
明治10	1877年	12歳
明治9	1876年	11歳
明治8	1875年	10歳
明治7	1874年	9歳
明治6	1873年	8歳
明治5	1872年	7歳
明治4	1871年	6歳
明治3	1870年	5歳
明治2	1869年	4歳
明治1	1868年	3歳
明治0	1867年	2歳
明治-1	1866年	1歳
明治-2	1865年	0歳

富太郎と壽衛

富太郎の初恋

1888(明治21)年、26歳の富太郎は一人の美しい女性に恋をします。その女性は、後に富太郎の妻となる壽衛(すえ)でした。壽衛は、元彦根藩士で陸軍の營繕部に勤務していた小澤一政と京都出身の母親との間の子として誕生しました。裕福な家庭であったため、幼少から踊りや謡など芸事を習っていましたが、父の死により生活が一変、東京飯田町で母と小さな菓子屋を営んでいました。

菓子が大好物だった富太郎は、東京大学の植物学教室へ通う道すがら「小澤菓子店」が気に入り、その店の中に居る美しい娘を見初めます。店に立ち寄るたびに娘への愛着が募り、菓子屋通いばかりでした。富太郎はその当時の心境をこう記しています。「私は悶々として、恋心を燃やした。(中略)私が、娘に話しかけようとする、真つ赤な顔をしてくっついてしまうのだった。」(『草木とともに』わが初恋より)

このころ富太郎は、神田錦町の石版屋の主人のもとで石版印刷の技術を学んでおり、その主人に仲を取り持ってもらう、富太郎26歳、壽衛15歳の時に現在の台東区根岸に所帯を構えました。



壽衛と富太郎 1916(大正5)年ごろ



1922(大正11)年8月

永遠の住処

経済的な負担は増え、家賃が支払えず家族で25回以上引っ越すなど生活は窮地に陥ります。壽衛は、そのような困難の中でも、働きながら、家族のための家づくりを計画します。土地決めから、部屋の配置決めに至るまでを手がけ、富太郎が大切に保管していた植物標本や蔵書が火事の被害を受けないよう、家屋の密集する都会ではなく雑木林の真ん中に終の住処を建てました。

1926(大正15)年、富太郎64歳、壽衛53歳の時、現在の東京都練馬区東大泉に居を移します。壽衛は、ゆいゆい、敷地内に立派な植物標本館を構え、ここに、富太郎のために植物園をつくりたいという夢を持ち、家族で富太郎の研究活動を支えました。

波瀾に富んだ人生

富太郎は、実家からの仕送りで植物研究と生活費を繋いでいましたが、祖母浪子が亡くなって4年ほど経った1891(明治24)年29歳に、実家の家財整理のため帰郷します。1893(明治26)年31歳の時に帝国大学理科大学の助手に任命され、はじめて俸給によって生計を立てます。しかし、養育費や採集旅行のための出費、必要な文献の購入など、月給だけでは生活することが困難となり、高利貸しからの借金は膨らみ、生活を切り詰めても返済が滞る日々が続きました。同郷の仲間や資産家などが窮地を救ってくれたエピソードも多く残されています。収集した植物標本の一部を学校へ売るなどして生活を切り盛りしましたが、研究のための借金が嵩み生活苦が続きます。

壽衛は30年以上、苦勞を苦勞とも思わず、子どもたちを学者の子として立派に育て上げるため、ひびい思いをさせないよう努め、富太郎には植物研究に集中できるように励まし続けました。「いやな顔一つせず、一言も不平を言わなかった」と、後に富太郎は、当時の貧しい生活のようすと妻への感謝の言葉を語っています。

妻への愛と感謝

新居を構えた翌年、壽衛は体調を崩し寝込むことが多くなりました。病床にあっても、富太郎の研究を心配する壽衛でしたが、新居が完成して力尽きるかのように、1928(昭和3)年2月23日に永眠しました。富太郎は、壽衛が亡くなる前年、仙台で採取したササの中から新種を発見します。限らない植物研究への励ましと愛を捧げてくれた妻へ、感謝と敬意を表し、そのササの学名を*Sasa suwekoana* Makino、和名をスココザサとし発表しました。富太郎はスココザサを自邸の庭に植栽しました。現在スココザサは、我が植物園として富太郎がこよなく愛した自邸の庭を公開する「練馬区立牧野記念庭園」と、富太郎の意志を受け継ぐ「高知県立牧野植物園」、生誕地である佐川町の「牧野公園」で、力強く生い茂っています。

富太郎の植物学解明という志を一番に理解し、家族を愛し、守っていた強い意志を貫いた壽衛。どんなにつらい状況に直面しても、弱気にならず前だけを見て突き進んだ生涯でした。富太郎と壽衛は、夫婦愛という言葉を超えて、固い絆で結ばれていたにちがひありません。

※参考文献: 牧野富太郎(2022)『草木とともに』牧野富太郎自伝。KADOKAWA。牧野富太郎(2004)『牧野富太郎自伝』講談社

自然が学び舎

生涯で40万枚以上の標本を収集

富太郎が生まれた高知県は、温暖多雨な気候の中、さまざまな地形や地質に適した多種多様な植物が生育しています。5,6歳のころから、佐川町の実家周辺の野山や緑豊かな森林を駆け回り、多くの植物を観察していました。さらには、横倉山や仁淀川町名野川にもよく採集に訪れ、植物を採り観察しては図に描き、わからないことがあれば書籍やあらゆる人から学ぶ独学の姿勢を貫きました。22歳で上京以降も、横倉山などの故郷の野山で次々に新種を発見していきます。並大抵ではない行動力と人間力を備え、沖縄を除く全都道府県、海を越え台湾・旧満州にまで植物採集に出かけ、未知の植物に学名を付け発表します。各地のフィールドワークなどで収集した押し葉標本(腊葉標本)は生涯で40万枚以上といわれています。生涯にわたり富太郎にとっては、自然そのものが学びの場でありました。



1904(昭和9)年高知市五台山を訪れた際に、富太郎が採集したシロドリランササの押し葉標本

世界に向けて発表



「日本全体の植物相(フローラ)を明らかにし、日本の植物誌をまとめあげる」という熱い志を持ち上京して5年。1889(明治22)年、日本を代表する学術雑誌の一つ「植物学雑誌」の第3巻第23号に、植物学者大久保三郎とともに新種*Theligonum japonicum*(ヤマトグサ)を発表しました。国内ではじめて日本人が新種を認識した記念すべき植物です。当時は、日本で未知の植物が発見されると、海外の植物学者に標本を送り、同定(植物が何であるか見極めること)を依頼していました。このヤマトグサの学名発表を機に、富太郎は、植物分類学者の草分け的存在として精力的に植物の分類学研究に励み、生涯で1,500種類以上の植物を発表しました。



ヤマトグサ

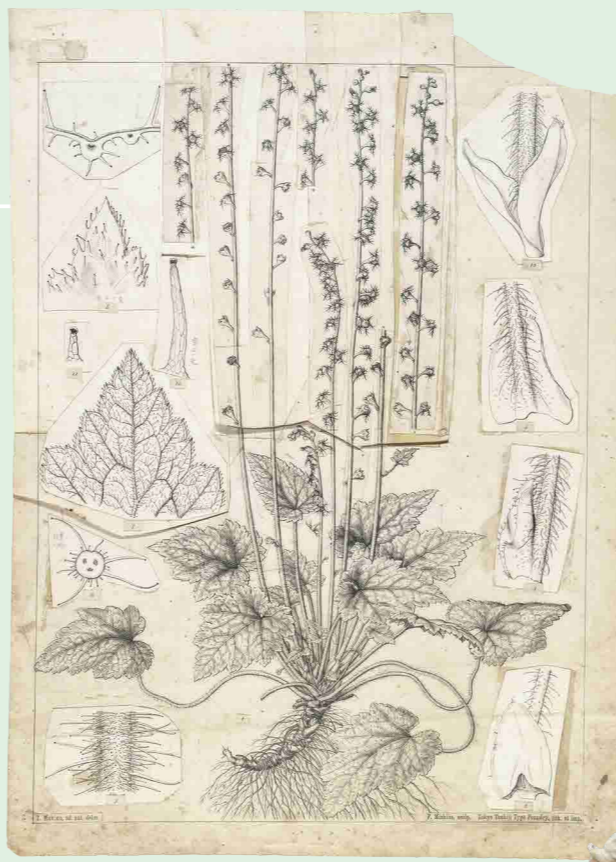
学名とは?
国際的な規則(国際命名規約)によって付けられる生物学上の世界共通の名称(ラテン語)です。
植物分類学とは?
約40億年という地球上の生命の長い歴史の中で生れた、さまざまな植物を認識して記録(発見・記載・命名)、その植物がもつ情報を整理してまとめ、共通の知識として利用できるように秩序立てて体系化する学問です。

植物を記載「牧野式植物図」

富太郎は、植物とは何かを追求し続ける中で、自らが精巧な植物図を描くことに注力しました。植物学者として鋭い観察力と天性の技というべき表現技術を用いて描いた植物図の数は「牧野式」と呼ばれ、この方式により種の全体像を明らかにすることに成功しました。花卉や葉、根の状態など分類学に必要な種の形態を完全に描き出し、さらに、肉眼では見えない内部構造などを顕微鏡やルーペを用い観察した解剖図や、開花から結実に至るまでの生長や季節による変化までをバランスよく徹底ふりと、妥協を許さない植物解明へのあくなき探究心が感じられます。牧野植物園には、スケッチなどもあわせて1,700枚あまりが残されています。富太郎の植物園を描く姿勢は、後に、植物画家太田洋愛(1910-1988)やサクラ研究の第一人者で緻密な描画を残した川崎哲也(1929-2002)など多くの研究者や植物画家に影響を与えました。



左)イワヤシダ『新撰日本植物図説顕花及羊歯類部』第1巻第10巻 第40図版 原因 ケント紙 墨
右)ホテイラン『大日本植物志』第1巻第4集第16図版 石版



シソクチャマルメソウ『大日本植物志』第1巻第2集第4図版 原因 ケント紙 墨



標本を制作する富太郎 1939(昭和14)年9月10日

牧野富太郎の業績

『牧野日本植物図鑑』発行



『牧野日本植物図鑑』初版本の赤字の校正

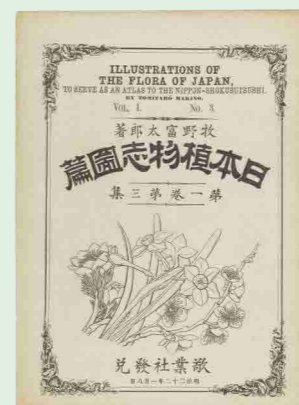
日本に自生するすべての植物を明らかにしようとしてきた富太郎は、晩年まで現役で植物の研究に没頭しました。1940(昭和15)年、富太郎78歳の時に、長年の植物研究と普及活動の集大成となった著作『牧野日本植物図鑑』が完成。原稿の書きはじめから発行までに約10年の歳月を費やしました。初版には、3,206種の植物の特徴がわかりやすく紹介され、綿密に推敲された植物の解説文と、植物図の第一人者として厳しい校閲を行った科学的に優れた植物図が記されています。この図鑑は、富太郎の考証による植物名の語源なども末尾に記載されており、幅広い植物の知識が詰まった、まさに富太郎の頭脳とでもいべきものとなりました。その後も、野外に持ち運びやすい学生版や、小型で彩色された原色図鑑などが出版され、発行から80年以上経った今も、多くの植物愛好家を中心に手引き書として親しまれています。



『牧野日本植物図鑑』ラインナップ

学術誌の刊行

1888(明治21)年、富太郎26歳の時、処女作となる『日本植物志図篇』の刊行を開始し、第1巻第1集から第11集までを私費を投じて出版しました。植物図版のほう文章よりもわかりやすいと、石版印刷技術を習得し、原因作製から製版、編集作業にいたるまで富太郎自らが行いました。その後出版した『新撰日本植物図説』や東京帝国大学発行の『大日本植物志』の植物図版の原因、克明な植物記載原稿の執筆など編集作業全ては富太郎の手によるもので、いずれも未完の植物誌となりましたが、こうして日本の植物誌をまとめあげるとい仕事成し遂げ、日本の植物分類学の基礎を築きました。



『日本植物志図篇』第1巻第3集



東京植物同好会の植物採集会 1941(昭和16)年7月6日

植物の普及活動

富太郎の業績の一つに、「草木は友だち」の精神を持ち、全国を行動する中で、多くの人々に植物の知識と植物趣味の魅力や楽しさを伝えた教育普及活動があります。インターネットや交通も発達していなかった当時、各地域の同好会の招きで大衆を引き連れた植物観察会を開催しました。富太郎の解説は人々を魅了し、全国からお呼びがかかるほどでした。こうした活動の積み重ねにより一般の人々の植物への関心が高まり、アマチュアの植物研究者も増えていきました。1909(明治42)年に創立された横浜植物会では、講師として会を指導。1911(明治44)年には、富太郎を会長とした東京植物同好会が創立され、現在も活動が続けられています。年齢の上下を超え、ともに学んでいくという考えのとおり、全国の植物愛好家からの質問の手紙には、誠意をもって返信していました。相互交流の中で富太郎も多くの知識を得、自らの研究にも大きな力となりました。



標本を制作する富太郎 1939(昭和14)年9月10日

牧野富太郎ゆかりの植物

ヤマトグサ [アカネ科]

Theligonum japonicum Okubo et Makino
4月~5月



日本において日本人が初めて日本の植物を新種と認識して学名を付けた記念すべき植物です。日本固有で、本州(関東地方以西)・四国・九州の山中の林下に生える多年草。茎の上部に咲く雄花は一日花で、花糸の長い雄しべが特徴的。富太郎が高知県吾川郡に淀川町名野川で採集した標本などをと、共著で学名を発表。「日本にあって極めて珍奇とすべき新種」と記しました。※本種は、開花時期限定の鉢展示となります。

ムジナモ [モウセンゴケ科]

Aldrovanda vesiculosa L.
7月~8月



日本、ユーラシア、アフリカ、オーストラリアに点在し、河川や湖沼などの水中に浮遊する食虫植物。二枚貝のような葉で、ミジンコなどを捕らえる。直径5mmほどの白い花は一日花。東京都江戸川区北小岩で国内ではじめてムジナモを発見し、1893(明治26)年「植物学雑誌」に精密な植物図を和名とともに発表しました。誰も見たことがない花が描かれていたため、世界に驚きを与え、富太郎の名が世に知られるきっかけとなりました。

バイカオウレン [キンポウゲ科]

Coptis quinquefolia Miq.
1月~2月下旬



※ここで紹介している牧野富太郎ゆかりの植物とは、牧野博士が学名を発表したり、和名を付けた、植物園に描くなどした植物を指しています。※上記の植物は、高知県立牧野植物園でご覧いただけます。開花時期は多少前後することがありますので予めご了承ください。

ヤマザクラ [バラ科]

Prunus jamasakura Siebold ex Koidz.
3月中旬~4月上旬



東北部から九州に自生し、我が国を代表する名花として古来より日本人に親しまれてきました。富太郎は見事な植物図を描き、自身の代表作『大日本植物志』第1巻第1集の記念すべき巻頭に採用しました。富太郎は日本にはまだまだ桜が少ないので、4月ごろ飛行機から見下ろすと全部桜で埋まっていなければならないと思えるほど大の桜好きでした。「山桜ほかの桜は臣下かな」と詠み、桜の中でもヤマザクラは特別であったことがうかがえます。

ビロードムラサキ [シソ科]

Callicarpa kochiana Makino
7月下旬~8月末



紀伊半島・四国(南部)・九州、台湾、中国南部、ベトナムに分布する常緑低木。高知県以外では極めて稀です。初夏に薄い淡紫色の花を咲かせ、12~1月に白色の果実をつけます。富太郎が高知市五台山で採集した標本などを基に、1914(大正3)年に新種として学名を発表しました。和名の由来は、葉裏に星状毛が密生し、触感がビロード(ベルベット)のようであることから。

ヨコグラノキ [クロウモドモドキ科]

Berchemiella berchemiifolia (Makino) Nakai
5月下旬~6月下旬



本州・四国・九州、朝鮮半島、中国に点在する珍しい落葉高木。石灰岩地で見られることが多い。5~6月に黄色の3~3.5mmほどの花をつける。果実ははじめ黄色で熟すと暗赤色になる。1884(明治17)年、富太郎が高知県高岡郡越知町の横倉山の山頂付近にある横倉宮のそばで最初に発見し、1898(明治31)年に「植物学雑誌」において新種として学名と和名を発表しました。

ジョウロウホトギス [ユリ科]

Tricyrtis macrantha Maxim.
10月中旬~下旬



高知県固有種で、石灰岩地の山深いけげに自生する多年草。1885(明治18)年、富太郎が横倉山で発見し、花が上品で美しいので上臈(じょうろう=宮中の貴婦人)の美しさに例え和名を付けました。黄花が大きく美しいため盗撮されることが多く、環境の変化による個体数の減少も相まって、極めて深刻な状況にある絶滅危惧植物の一つです。

ヒメノボタン [ノボタン科]

Osbeckia chinensis L.
8月~9月



植物の盗掘、生態系の攪乱(外部からの植物の持ち込み)、踏圧などをなくし、野生植物や自然環境をみんなで守っていきましょう。